

目次

序にかえて

久野雅司 1

総論 足利義昭政権の研究

久野雅司 6

第1部 足利義昭上洛前の政情

I 上洛前の足利義昭と織田信長

渡辺世祐 60

II 和田惟政関係文書について

久保尚文 71

III 足利義晴と義昭期における摂関家・本願寺と将軍・大名

水野智之 96

IV 室町将軍足利義昭と徳川家康

柴 裕之 127

第2部 室町幕府の再興と織田政権との関係

I 足利義昭と織田信長との関係に就いての研究

渡辺世祐 132

II 戦国期幕府奉行人奉書と信長朱印状

山田康弘 146

III 戦国期室町幕府奉行人奉書にみる「執申」の文言をめぐって

木下昌規 179

| | | | |
|---------------|---------------------------------------|-------|-----|
| IV | 室町幕府と織田政権との関係について —足利義昭宛の条書を素材として— | 白井進 | 205 |
| V | 足利義昭政権と織田政権 —京都支配の検討を中心として— | 久野雅司 | 227 |
| VI | 将軍足利義昭の女房大蔵卿局をめぐる | 木下昌規 | 245 |
| 第3部 足利義昭政権の構造 | | | |
| I | 足利義昭政権論 | 久野雅司 | 250 |
| II | 将軍足利義昭期における幕府構造の研究 —奉公衆を中心として— | 川元奈々 | 278 |
| III | 足利義昭の栄典・諸免許の授与 | 水野嶺 | 310 |
| IV | 足利義昭の子孫 | 宇野日出生 | 339 |

巻末表／あとがき／初出一覧／執筆者一覧

足利義昭

総論 足利義昭政権の研究

久野雅司

はじめに―足利義昭政権の研究状況と本書の視座・構成

本書は、足利義昭政権についての論考を収載した論文集である。足利義昭は、織田信長に「擁立」されて上洛を遂げたことによって永禄十一年（一五六八）十月十八日に室町幕府の第十五代征夷大将軍に就任することができ、その経緯から義昭政権はこれまで信長の「傀儡」であると考えられてきた。そのため、「傀儡」の義昭には政治の主体性・実権はないと認識されてきたため研究の対象とされることがなく、室町幕府最末期の研究は主として「傀儡」を主導した織田信長を中心として検討され、その関連において義昭について考察されてきた。足利義昭の事績については、奥野高広氏が著した人物叢書と桑田忠親氏の著作によってその生涯を詳しく知ることができ⁽¹⁾、三鬼清一郎氏が編集して一九九九年三月に著した『織田・豊臣政権研究文献目録』（名古屋大学文学部日本史研究室）に拠れば、「足利義昭」に関する論文はわずかに十七本だけであることから、二〇〇〇年代に至るまで義昭に関する専論は全くといっていいほど無い研究状況だった。

足利義昭に関する学術研究の原点ともいべき論文は、渡辺世祐氏の業績といえる。渡辺氏は『史学雑誌』に掲載された本書収録の二本の論文を執筆し、それまで軍記物語でしか語られてこなかった義昭と信長の関係について、古文書・古記録の一次史料を駆使して実証的に且つ両者の関係性を客観的に論じ、近代歴史学の黎明期において優れた研究論文を著した。同時期の研究としては、徳富蘇峰氏が大著『近世日本国民史』「織田氏時代」を著しており、ここで両者の関係について「義昭の目的は、室町將軍家の再興」で「信長の目的は、天下統一」であり、信長は「ただ旗を洛中に入るる方便として、彼を奉じたのにすぎぬ」「一切の自由を剥奪し、ただ將軍の虚名と、空位とのみを与え措」き「義昭の手中より、政権全部を信長に引き渡した」と述べている⁽²⁾。また、大正期においては田中義成氏の研究もあり、その著作『織田時代史』において「信長賊を討つと称し、義昭を仮りて天下に号令せんとするに過ぎず」「其実権は信長に帰して義昭は唯虚名を擁したるに過ぎ」なかつたとしている⁽³⁾。また、義昭追放後の「天正」への年号改元に則して信長を「抑信長が義昭を逐い、京都に凱旋し、俄に改元を奏請せるは、此時を以て信長は全く足利氏に代りしものなれば、其真意は革命的意義を以て、年号を改めたるものと見るを得べし、故に足利幕府と織田時代との時期を画するには、実に此時を以てすべきなり」と述べている。以上のように、足利義昭政権は戦前より、信長の目的は天下統一で、そのための上洛の名目として義昭を利用し、義昭政権は信長の天下への号令のために利用された実権のない「傀儡」政権⁽⁴⁾と述べられてきており、田中氏の言説にあるように信長は「革命児」として室町幕府を打倒しなければならぬ存在とする見解が今日における「通説」となってきたといえる。

室町幕府の評価としては、第八代將軍だった足利義政の後継をめぐって幕府が東軍・西軍に分かれて抗争した応仁・文明の乱（一四六七―七七七）によって將軍の權威が失墜し、さらに明応二年（一四九三）に起こった前管領細川

政元が將軍を廃立した明応の政変によって幕政は細川家が主導することとなり、それまで幕府の支柱として幕政を運営していた斯波氏・畠山氏の管領家や京極氏・山名氏・一色氏・赤松氏の四職家が没落したために幕府権力が低下し、幕府は中央政権としての政治的能力を失って形骸化していたと理解されてきた。⁴そのため室町幕府中・後期の研究は、中央政権の権威が失墜したことにより代わって台頭してきた各地の守護や戦国大名といった地域権力を主たる対象として進展するようになった。

戦後、室町幕府の研究は小川信氏による足利一門や細川氏・守護に関する研究、福田豊彦氏の將軍近習や奉公衆に関する研究、桑山浩然氏による引付史料を基とした評定の研究、二木謙一氏の幕府の組織や儀礼に関する研究など、主として幕府の内部構造の側面から考究された。

一九七〇年代になると、今谷明氏が戦国期における幕府関係文書を網羅的に蒐集して將軍を擁立した管領細川氏とその家宰三好氏を中心とした畿内政治史の研究を行った。⁶今谷氏によると、戦国期の室町幕府は幕府を独占した管領の細川京兆家と密接不可分な関係で、三好氏や茨木氏も「管領代」として「管領代奉書」を発給して幕政に参画していたとする「細川・三好政権京兆専制論」を提唱した。また、幕府自体も官僚制度として奉行人層が幕府機能を再生産していたことを明らかにし、細川・三好権力による管領代奉書と幕府の奉行人衆から発給される奉行人奉書は相まって幕府の支配文書として有効な効果を發揮していたことを指摘した。そのため、戦国期の幕府は形骸化していたわけではなく、政権として機能していたことを明らかにした。戦国期における室町幕府の特質を示す事例として、和泉国堺を居所として將軍に任官することはなかったが、事実上の將軍であった足利義維が京都に居なくても幕府を主導することが可能となった「堺幕府」論を提示している。⁷さらに、最後の「管領代」三好長慶のもとに細川政権に反発

した国人勢力が結集したことによって長慶は権力を掌握し、足利第十三代將軍義輝を京都から追放して細川氏から権限を継承・吸収したことで京都を支配することとなった。今谷氏は、長慶は幕府とは関わりなく独自に直状の「長慶裁許状」を発給して独裁体制を確立したことから、三好政権は畿内で初めて將軍や幕府を要しない権力と評価した。⁸

さらに一九八〇年代以降は、幕府自体について設楽薫氏や山田康弘氏等によって研究がなされてきた。⁹設楽氏は足利義教・義尚・義材・義晴期の幕府について、幕府の裁許記録である「伺事記録」などの分析を通して將軍側近である内談衆・評定衆の機能や政治的役割、將軍が主宰する「御前沙汰」などを検討し、幕府内部構造の解明や意志決定方法・政務決裁過程を明らかにした。山田氏も幕府の訴訟手続きや意志決定について考察し、さらに將軍と戦国大名との関係についての研究も行い、戦国期において幕府は政治的に機能しており、將軍権威は戦国大名にとっても政略上、政治的に必要な存在であったことを指摘した。この設楽氏・山田氏の一連の研究によって、戦国期の室町幕府は没落することなく機能していたことがさらに明らかになり、將軍の権威も大名との関係において維持されていたことが明らかとなった。また、今谷氏による畿内政治史・守護の研究は、細川氏について論じた森田恭二氏・古野貢氏・浜口誠至氏や、小谷利明氏による「畿内戦国期守護論」、天野忠幸氏の「三好政権論」によってより詳論され深化されるに至った。¹⁰

このような研究状況から、室町幕府中・後期の研究成果を踏まえて二〇〇〇年代に至ってようやく、足利義昭政権について従来の通説的な見解に対して実態を明らかにすることによって批判的に検証する研究が行われるようになり、義昭政権が客観的に見直されるようになった。本書はその足利義昭を中心とした義昭政権についての研究成果を採録した論文集である。全体の構成は義昭の事績に即して、「第1部 足利義昭上洛前の政情」、「第2部 室町幕府の再

興と織田政権との関係」、第3部「足利義昭政権の構造」の三部構成として十一本の論文と三本の論考を採録した。なお、附録として巻末に①足利義昭文書目録、②足利義昭政権奉行人奉書文書目録、③足利義昭政権幕臣一覽表を附した。①②は主として『大日本史料』と『大日本古文書』を基に作成した。③は、元は本書第3部収録の拙稿「二〇〇九」に収録されていた表である。本書収録にあたって、利用上の便宜を図って附録として本書末に移動した。

収録論文は、初出の年代をご覧いただければお解りのように、多くが二〇〇〇年以降の研究である。なお、これら学術論文の公表をうけて二〇一四年に谷口克広氏が『信長と將軍義昭』を著し、木下昌規氏が『信長研究の最前線』で「信長は、將軍足利義昭を操っていたのか」を執筆され、信長との関係についての総括がなされた。また、神田千里氏・金子拓氏は「天下」を鍵として信長との関係について新しいテーゼを提示された¹⁾。このように主として義昭政権は、近代歴史学以降、二十一世紀に至ってようやく客観的に評価され研究の対象となったといえ、その途についてといえる。以下、収録論文の研究成果に拠り本書の構成に即しながら足利義昭政権について概述する。

第一章 永祿の政変と一条院覚慶（足利義昭）の南都脱出

足利義昭は、天文六年（一五三七）十一月十三日に室町幕府第十二代將軍足利義晴の次男として京都で出生した。母は関白近衛尚通の娘（慶寿院）であり、同母の長兄にのちに足利家の家督と將軍職を嗣ぎ第十三代將軍となった義輝がいる（本文末の系図参照）。幼名は現在のところ一次史料では確認できていないが、江戸時代に記された『江源武鑑』には「千歳丸」とある¹⁾。足利將軍家では継嗣以外の男子は仏門に入るのが慣例だったことから、天文十一年十一

月二十日に祖父尚通の子で血縁的には義昭の叔父にあたる、時の関白近衛植家の猶子となり、南都興福寺の一乗院門跡に入って「覚慶」と名乗った。永祿五年（一五六二）には、藤原近衛家の人として門跡を嗣いだ。將軍家と摂関家との関係については本書第1部収録の水野智之論文に詳論されており、永祿八年末に誓願寺と円福寺とで争われた誓願寺泰翁の参内についての争論において覚慶を執奏に擁する動きが認められるが、それ以外にこの頃はまだ政治的な活動は認められない。

永祿八年五月十九日に兄の將軍足利義輝が京都の將軍御所二条邸において三好政康・同長逸・石成友通の三好三人衆と三好家家臣の松永久秀らに襲撃されて自害に追い込まれ、さらに母の慶寿院と、弟で仏門に入り鹿苑寺の院主となっていた周暲が弑逆される、いわゆる「永祿の政変」がおこった。覚慶は將軍の次弟であったことから、一乗院内において幽閉されることとなった。元々義輝の近臣だった細川藤孝と一色藤長らは、三好・松永勢力からの政権奪還と將軍親政による幕府の再興を図り、それから約二ヶ月後の七月二十八日に覚慶を大和から脱出させることに成功し、近江国甲賀郡の土豪和田惟政を頼って逃亡した。覚慶は、これを契機として以後政治の表舞台に立つこととなった。二十八歳の時である。

この時の覚慶逃亡の計画者には藤孝や藤長といった幕臣だけではなく、「堺公方」を擁する三好三人衆に対抗して第十一代將軍の義澄の系統（義晴―義輝）に將軍職を嗣がせようとする覚慶の伯父にあたる大覚寺義俊や、それに協力する越前国守護の朝倉義景等の働きがあったことが、第1部収録の渡辺世祐論文によって明らかにされている。さらに、この脱出計画には和田惟政が主導的な役割を果たしたことが、第1部収録の久保尚文氏が紹介された、現在京都市歴史資料館に所蔵されている惟政の子孫に伝来された「和田家文書」に関する論文によって、詳しく知ることが